

# 慈眼寺たより

第23号  
平成29年12月  
春日井市下市場町  
「慈眼寺」  
電話 81-6801  
編集 伊藤秀文

## ☆僧堂生活(2)★

春日井律舟

もうじき慈眼寺だよりの年末号を印刷するのでそろそろ僧堂生活の原稿を書いてくれと住職に言われて当時付けていた日記を引つ張りだした。

修行中の自分はあまりに今の自分とかけ離れた規則正しい生活を送っており、なかなか規則や環境に縛られないと自分を律するのは難しい事だとあらためて気付かされ、反省した。

修行道場というのは何処か冬の寒い朝の空気のような張りつめた雰囲気がある。

日記を開くとその当時を思い出す。不自由な事も多かったが、靄のかかる山肌に沿うように建てられた伽藍は私の頭の中ですべて美しく蘇る。

修行仲間は仏教系の大学を出てすぐに実家のお寺を継ぐ

為に修行に来る者が圧倒的に多い。中には私のように社会人を経験してから修行に来る跡継ぎも少数ではあるが、いる。そしてごく少数、六十歳を超えてから等いわゆる『お寺の跡継ぎ』ではなく、普通に社会生活をされていて、思い立って出家され修行に来た方もみえる。

修行中の当時、自ら選んでこの道に入った人に尊敬の念を感じていたし、また思い立った経緯が不思議でもあった。

曹洞宗の修行というのは限界に挑戦するとうような厳しいものではない。どちらかというと少しの我慢、少しの不便を体験する、そんな生活である。その生活を終えてみて、何か自分の中に変化や成長があったかと言われると客観的に考え

て残念ながらとくに無かったと言わざるをえない。

ただ一つその生活を終えて思う事は、お山で見た月はとても綺麗だった。夜九時に開沈(就寝)のため坐禅堂に向かう時、法堂の大きな屋根の上にて月はとても明るく皆で立ち止まり見上げた。朝夕に寺の梵鐘や鳥さえずりの響く、靄をまと山々はとても荘厳で、畏敬の念を感じた。春には山に筍、水ぶきを採りにいき、秋は銀杏を拾い、冬は大根で沢庵をつき餅をついた。

情報社会から取り残された不便や我慢を強いる生活ではあったが必要なものはすべてあり、世の中に溢れた便利な情報というのは十分な幸せを感じるには特に必要ないという事に気付かされた。

しがらみを捨て福田衣(お袈裟)を纏う、じつはなかなか出来ない贅沢な体験だ。

山内の生活を思いだすとき日記を開かなくても思い出す一人の年配の女性がいる。彼女の言葉は暫くの間、胸の奥に刺

さっていた。

その女性に出会ったのは七月のうだるような暑いさなかだった。

過疎と高齢化の進んだ奥能登のお寺ですが恒例行事は沢山あり、その中に万燈供養という法要がある。

### 〈青柳歌壇・俳壇〉

●青柳山もみじの盛りとなりけり  
●バンバン雪ショットバーのバラ  
タイン

伊藤清雄

●まっすぐに伸びて水引咲きそむる  
●庭畑の葱に土寄す旅支度

伊藤貴美子

●草いきれ土葬名残りの石の台

●山国の齋ときの支度や胡桃割る

矢野孝子

●立秋や止むこともなし蟬時雨暑さに耐えて庭の草摘む

●年三度青春一八切符買い各駅停車の旅を楽しむ

今井正

●「花つけました」と住職の指先ほろほろ枝垂れ梅咲く

個人的に好きな法要で涅槃会や降誕会といった法要は昼間行うのに対し、万燈供養は夜に行う。境内のいろいろな所に仏画や動物画を描いた大小様々な提灯を飾る。陽が傾き始めると観音様やお釈迦様、犬や猫が影になり境内に長く伸びる。その周りで近所の子共達が走り回る。陽が沈むとお参りの人々は提灯の飾られた薄暗い法堂に集まる。法要は薄暗い法堂で行われる。

まず法要の前日以前に塔婆勸募と言ってお寺のご近所の家々をまわり、亡くなられたご先祖の方を確認して供養する為に、故人ひとりひとりに小さな塔婆を作成する。薄い小さな塔婆なので値段は安く一つ三〇〇円だ。

大概のお宅では塔婆は去年通りでお願いしすと言われる。代々続くような地主さんの家なんかは江戸時代からの供養を例年通りお願いしてくるので塔婆は結構な数になる。

まれに今年は何々が亡くなつたので一人追加お願いしますと言われることもあるがとく

に悲しい感じで言われる事はない。

その女性のお宅も仏さんが増えたお宅だった。

それまで何十件と回った家々と同じように玄関に出てきた女性に『塔婆勸募に参りました。仏様は去年と一緒ですか?』と聞いた。

玄関にしゃがみこんだ女性は『少し前に両親が、去年は主人が亡くなり今年に息子が亡くなりました。私はどうしたらいいんでしょうか?』と聞いてきた。

『……』

不意打ちに合った気分だった。

『息子さんはおいくつでしたか?』

『四〇でした』

『まだお若いですね……』

僧侶として何か言わなければと思いましたが、彼女の経験した悲しみを推し量ることの出来ない私は固まった。

『一枚三〇〇円になります。』

『はい、お願いします』

どう答えたら良かったのか暫く考えたが結局答えのわからぬまま万燈供養でお経を唱え

た。せめて心を込めて唱えようと思った。

供養を終えた塔婆は参拝の方と一緒に声明を唱えながら山門まで運び一枚一枚大きめのかがり火の中に投げ入れる。唱える声明は『南無無く大悲く観世音』。意味は『すべてを投げうって観音様に帰依します、おすがりします』だ。鎮魂の法要の後、参拝者達はお祭りの後のようにはしゃいだ感じで皆でお話をしながら帰っていった。

その時の答えは出さずじまいでしたが、後日ある本でお釈迦様が我が子を亡くして悲しみにくれるゴータミーという女性の心を救う話に出会った。あの時の年配の女性を思いながら読み進めた。

我が子を生き返らせて欲しいと亡骸を抱えて頼むゴータミーにお釈迦様は『その葉を作るには芥子粒の実がある』と言う『ただし今まで一人も死者を出したことはない家から貰って来なさい』と付け加える。ゴータミーは我が子の亡骸を抱

えたまま一人も死者を出したことの無い家を必死に街中探し回る。が、そんな家がある訳も無くだんだんと正気に戻って行く(皆悲しみに耐えて生きているのだ、泣いているのは私だけではない)。

ゴータミーはお釈迦様のいる場所に戻ると芥子粒は貰えたかと尋ねるお釈迦様に『私には芥子粒はもう不要です。この子はこのまま安らかにねかせてやります』と聞いて我が子を亡くした悲しみから解き放たれるという話だった。

なるほどと思った。何も愛別離苦に限った事ではない。おおよその不幸というものは自分ばかりと感ずると悲しみは深くなる。が、そんなはずは無い事に気付く事が出来ると受け入れられるようになる。

あの時女性に芥子粒の話をすれば良かったとはさすがに思わないけれど、もう少し勇気を持って寄り添い話を聞く事が出来たのではないかと振り返り思いました。



せんりょう

## ★日記と自分史☆

今井正

敢えて自分に何か特筆できるものがあるとすれば・・・それは六十二年に亘り日記を書き続けていることだろうか。昭和二十六年一月十五日、多治見市の成人式で、市長が祝辞の中で「諸君は、どんな小さなことでもいいから生継続けるものを一つ持ちなさい」と述べられた。市長のこの一言が胸に刺さった。今日から生継続けるもの、一体何があるのか？ 自分なりに思いを巡らせた。「そうだ！ 今日から死ぬまで日記を書こう」と心に決めた。

書き留めた日記が増えて保存困難となり、喜寿を迎えたとき、後ろ髪を引かれる思いで五十冊を処分した。傘寿を境に書く欄の多い一年日記から欄の少ない三年日記に切り替え今日に及んでいる。日記は時には気持ちのはげ口になりストレスを和らげ、時には忘れていた漢字や熟語を思い出す等、呆け防止の一助ともなり、時には重要な備忘録ともなる。日記には金銭出納簿的なものも付加さ

れており、用い方によっては生活を律する好個のツールであるとさえ思っている。

何年か前に職場の先輩三人から自分史の謹呈を受けた。じっくりと拝読、筆致は三人三様だが、いずれも生い立ちからの生き様がリアルでストレートに描かれており、心を揺さぶられた。感銘にも似た読後感が「自分も自分史を書いてみよう」との気持ちに触発させた。執筆と休筆を繰り返して二年がかりで自分史と自分史的短歌集の二冊を上梓することができた。

自分史のタイトルは『生きて生かされて幾山河』である。自分史的短歌集の表題は『心のひとしづく』である。この二冊は兄弟と子や孫に配布した。現在、第三作の家族史を執筆中である。自分史が自慢史にならないように配慮し、これからも遠き日から近き日まで思いを馳せ、拙い短歌と文章にペンを走らせて行きたい。自分史は子々孫々に残しておくべき家督的価値の高い一つの遺産であるとさえ思っている。

## ☆律舟立職★

立職とは首座（しゅそ）を勤めることである。どこの寺でも住職が就任するときには、結制と言って三か月の修行道場を催すことになっている。これがいわゆる晋山式であるが、この修行道場の一番弟子が首座である。具体的にはその首座が、新任の住職に代わって問答をする法戦式（ほっせんしき）を勤めるのである。



去る十一月十二日、北名古屋市の雲太寺という寺院で晋山式が行われ、律舟が首座を勤めました。前日の入寺式から始ま

## 平成三十年度年忌表

来年の年忌は次のとおりです。お早めにお申し込みください。

年忌	逝去年
一周忌	平成二十九年
三回忌	平成二十八年
七回忌	平成二十四年
十三回忌	平成十八年
十七回忌	平成十四年
二十三回忌	平成八年
二十七回忌	平成四年
三十三回忌	昭和六十一年
三十七回忌	昭和五十七年
四十三回忌	昭和五十一年
四十七回忌	昭和四十七年
五十回忌	昭和四十一年

各戸別の年忌はホームページでも見られます（過去帳閲覧）。

## 行事予定

○二月十一日 大般若会

正午から詠讚歌奉詠

一時から法要、参拝者には健康饅頭がもらえます。

○二月十五日 涅槃会

十時から法要と詠讚歌奉詠

○四月八日 灌仏会

十時から法要と詠讚歌奉詠

甘茶を頂いてください。

○八月十八日 お施餓鬼

棚経は八月十日くらいからです。詳しくは次号でご案内します。

り、住職の晋山式に続いて法戦式が行われました。写真は、その時の問答に使うシツペイという法具を捧げているところだと思います。総代の方々にも参列いただきました。

来年春に修行道場が解散となり（解制という）、その後永平寺と総持寺で瑞世という儀式を行って、一人前の僧侶になつていきます。というのが建前ですが、本当は修行は死ぬまで続くのだと思っています。

### お仏膳の受付をしています

来年の月命日お仏膳の受付をしています。今まで通り、一年一膳あたり千五百円です。お供えのお菓子はお下がりとしてお持ち帰りください。

### ★本堂に床暖房が入る☆

本堂の畳を撤去して、床暖房を入れてもらいました。ガスで温水を作り、床板の下を循環させるもので、エアコンほど強烈ではありませんが、足元からホントワカと温まり快適です。今まで本堂の法事などで寒い思いをさせておりましたが、これからは大分改善されます。三百五十万円ほどかかりましたが、皆

さんからの寄付金で賄わせていただきました。ありがとうございました。

## 来年もよろしく お願いします

檀方総代	伊藤辰男
々	伊藤久幸
々	伊藤秀文
々	伊藤正廣
々	大野和義
々	大野悟
々	木村廣孝
住職	春日井浩道

### ☆世相雑感★

民、信無くんば立たずという

言葉があります。論語の中の孔子と弟子の問答なんです。弟子が国の要件を訪ねます。孔子が答えて「まず国を守るに十分な兵力があること、国民が十分食べられること、それに国民の信頼だ」と言います。では一つ無くするとすればどれでしょうか。曰く、それは兵力じゃ。武力無くしても国は守れないことはない。では、もう一つ無くするとすればどれでしょうか。曰く、食じゃ。人間はいずれ死ぬ。それでも全員が死ぬということはないであろう。だが、国民の信頼無くしたら国はなりたたない。

総理大臣は、自分のお友達に国有財産を安く分けてあげたり、無理やり獣医学の大学を作らせようとしていました。それが追及されそうになると、臨時国会で解散、総選挙。北朝鮮を

ネタにして「国難突破解散」ということになってしまいました。挙句、アメリカ大統領の娘さんに五十何億円を寄付（国の金です）、大統領からは何千億円もの武器を買わされてしまいました。

大統領はアメリカに帰って、自分のセールの成果を自慢していたそうです。なんだかアメリカは北朝鮮との緊張を煽りたて、武器を売り歩いただけの話ではありませんか。

またその選挙で、民進党がつぶれてしまいました。以前から言動に不安のあった前原代表が、タレント人気で自信満々の都知事にすりより、都知事さんはまるで自分が出れば、圧勝できるかのような幻想に目くらみ、全員当選すれば過半数になるほどの候補者を立てて、大失敗。引込んでしまいました。

横田めぐみさんの両親が、総理大臣に金正恩と話し合っ

ほしいと言っていました。本当に拉致被害者を取り戻すならそれは必要なことだと思いません。その点で小泉さんは立派だったと思います。

### ★編集後記☆

あつという間に年末の気配。今年も秋にも雨が早く、あまり秋晴れの実感はないまま冬になつてしまつたようです。

以前慈眼寺たよりで、弥勒山から富士山が見えたとき書きました。あれは富士山ではなく南アルプスの「黒法師岳」という二千メートルほどの山でした。それにしても、山の形といい、見える方向といい、富士山そっくりで人騒がせな山でした。でも正直、富士山にしては少し小ぶりの感じはしておりました。皆様方にもよい年になりますように。

「慈眼寺たより」第二十三号

平成二十九年十二月十日発行

ホームページ

←

←  
<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/>